

# 日本戦闘の者



荒谷 卓（あらや たかし）  
 生年月日：昭和34年秋田県出身  
 略歴：昭和53年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職(1等陸佐)。海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。  
 平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。  
 平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める  
 著書：『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ』『特殊部隊vs.精鋭部隊—最強を目指せ』並木書房／『自分を強くする動かない力』三笠書房  
 熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス  
<https://musubinosato.jp/>

044

国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里  
 代表：荒谷 卓



2014年夏、スイス・ジュネーブにある世界最大規模の素粒子物理学の研究所である欧州原子核研究機構（CERN）に招待された。

平成30年（2017年）10月、明治神宮御祭神明治天皇に仕え奉り10年の節目、至誠館館長を辞任した。そして、俺の人生の総仕上げとして、日本再建の使命を果たすこととした。使命とは、天から授かった命にしたい己の生を使い切ることだ。

日本の歴史上、日本を否定する者どもに日本が支配された時代は現代以外にない。まさに、日本の戦闘者にとっては、為すべき使命が山ほどある生きがいのある時代だ。日本の歴史をふり返ると、多くの困難な時代があったが、特に、足利幕府内の権力争いから世の中が乱れ、武士迄が私利私欲にまみれた戦国時代は危機的であった。この時代の世相を応仁記には「天下は破れば破れよ。世間は滅ばば滅びよ。人はともあれ、我が身さえ富貴ならば」と表現してあるが、まさに「国家が破綻しようが、日本社会が減じようがどうでもいい。人を蹴落としてでも自分さえ金持ちになればいい」という現代の世相と同じである。このような見苦しい世相が生まれる背景は今も昔も共通している。当時の国の指導者たる将軍足利義満が、明の永楽帝から「日本国王之印」を貰うために、天皇を天皇と呼ぶのを止めて院と呼び、天皇の勅使を引見し下座に座らせる有様であった。現代の日本も、米国のご機嫌取りの総理がオリビッ



2018年冬。



2019年初夏。

クの開会式で天皇と同列に座る不敬をみればよくわかる。世俗政府による利権まみれの内政と卑屈な対外政策、これが日本歴史上最悪の時代の共通事項だ。この足利～戦国時代には、天皇の政治への関与を完全に退け、伊勢神宮の御遷宮、大嘗祭、大祓等伝統文化行事をことごとく廃止するなど伝統文化破壊が進んだ。案の定、現代も同様に天皇は政事から排除されて政治・行政・司法から倫理と道義が喪失し、文化は破壊され国民集団としての歴史を一貫する国家理念が喪われて社会は混乱する。

国防と言えば、武力攻撃事態対処と決めてかかるかもしれないが、武力攻撃によらなくとも消滅した国はいくらでもある。まさに今の日本は、武力攻撃がなくとも消滅しかねない。国の存亡を米国とドルに100%依存してしまっただけで、まさに今、米国とドルの破綻を目前にして、日本は、自分で自分達の未来を描くことが出来ない状況だ。

平成30年8月8日、天皇陛下（現上皇陛下）が、ご在位中に渙発（かんぱつ）したおことば（みことり）に「国内のどこにおいても、その地域を愛し、その共同体を地道に支える市井の人々のあることを私に認識させ、私がこの認識をもって、天皇として大切な、国民を思い、国民のために祈るという務めを、人々への深い信頼と敬愛をもってなし得たことは、幸せなことでした」とある。正にここに、国を守るとはどういうことかということが集約されている。われわれ日本国民は、自らが生きる土地で伝統的共同体を地道に支え、自らが日本文化そのものに成って生きていくことが大事である。日本文化を体現しえないものが、いくら国防や経済成長等と言ったところで、そこに日本はない。日本とは無形の文化集団である。文化集団としての日本人が普通に生きるこそが国防の源である。

先ずやるべきことは、日本建国の理念である「八紘為宇（一つの家族のような国家）」づくりを目指すこと。それは、上皇陛下の「おことば（みことり）」どおり「地域を愛し、その共同体を地道に支える」ことである。

俺は、上皇陛下のみことりに従い、すぐにその実践を決断し、三重県熊野市飛鳥町に移住して、日本文化防衛の為の活動を始めた。

何故、熊野にしたのかについて一言話しておく。すでに述べたとおり、俺は自衛官時代から、百姓侍村の創建を考えて関東一円を見て回った。いい環境、いい場所、い

い人たちと多く出会うことが出来た。しかし、何かが足りなかった。あらためて、活動を開始する場所を探していると、三重県熊野市飛鳥町に「四季の里」という物件が見つかった。さすがに三重県までは調査域に含めていなかったで、早速持ち主に電話してみた。物件の持ち主は、吉野熊野新聞代表取締役の谷川氏であった。電話に出たのは谷川氏の奥様であったが、意外な答えが返ってきた。「お父さんは、売らないと思いますよ」と言う。さてさてどうしたものか。「なぜでしょうか？」と質問してみると、「お父さんは、この施設を青少年の健全育成のために立てたので、その思いを引き継いでくれる人でないと売らないんです」との答えだった。「まさに、そのための施設を探しているんです」と答え、とにかく直接お話しすべきと思熊野に向かった。東京からは、新幹線を使っても、飛行機を使っても5時間以上かかる場所であった。熊野は、俺にとっては全く初めての地であったが、何故か前にもここに居たような感じを受けた。

吉野熊野新聞社に到着すると、谷川ご夫妻は暖かく迎えてくれた。谷川氏は、三重県神社庁の総代長をつとめ、伊勢神宮の総代会も務めていた。また、熊野市の防衛協会会長でもあった。俺は、元自衛官で現在（当時）明治神宮武道場至誠館の館長をしていること、そして、日本人育成拠点と日本の再建拠点として「四季の里」を使わせていただきたい旨を率直に話した。あつという間に意気投合した。谷川社長が「四季の里」は任せると言い、俺は「任せてください」と言った。

その後、「四季の里」（現在の「熊野飛鳥むすびの里」）に案内された。一瞬で「ここが俺が求めていた地だ」と感じとった。

数年後、熊野に移住してから、この場所がどうい場所かわかってきた。伊弉冉命の御陵。神武天皇の金の勾玉と節霊（ふつのみたま）の御痕跡。南朝皇子絶命の地。国家護持のために生まれてきた俺にとって、来るべきところに来たと確信できた。

早々、この活動拠点を「国際共生創成協会熊野飛鳥むすびの里」と命名した。「国際共生創成協会」という長ったらしい冠は、万物万象共生こそが宇宙の真理であるとする日本伝統文化に基づき世界をグローバル資本主義（新世界秩序）から救済するための国際的連携を意図している。「熊野飛鳥」は、その活動エネルギーを秘めた土地。「むすび」とは日本神話の「産霊（むすひ）」すなわち宇宙創元の原理を顕している。

こんなことを言うと、最近の日本人は「カルト集団」かと思うらしいが、自分の国の神話をカルトと一緒にするんだから困ったもんだ。平成26年（2014年）夏、俺は、スイス・ジュネーブにある世界最大規模の素粒子物理学の研究所である欧州原子核研

究機構（CERN）に招待された。そこで、CERN国際部長等職員の人たちと食事も交えて懇談し、最新の素粒子物理学の立場からの宇宙創造の原理について話を聞いた。「宇宙はビックバンという宇宙の中心からの巨大なエネルギーの放出によって始まった」とする理論を実証的に証明しているという。そして、宇宙は、非物質のエネルギーによって創造されたということや、非物質が物質に転移する交換原理、ブラックホールのようなマイナス・エネルギーの存在等を説明してくれた。

その説明は、古事記の冒頭の宇宙の成り立ちと全く同じだった。初めに宇宙生成の中心エネルギーとして「天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）」が成り顕れた。人知を超えたエネルギーには神の名を冠して尊称するのが日本の作法だ。天の真ん中の神と言う名前がそのまま、この神の性質を表している。この神は、外から宇宙を創ったのではなく、宇宙そのものとして成ったというところに特徴がある。そして、「天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）」の中心エネルギーを拡張する所謂ビッグバンのような働きが「高御産巢日神（たかみむすびのかみ）」であり、エネルギーを中心へと集中させる所謂ブラックホールのような働きが「神産巢日神（かみむすびのかみ）」だ。「古事記」では、このエネルギーの集中と拡張により、宇宙の成長、即ち万物万象の生成活動がエネルギーに連続的に為されてく様を、「次に成る神は……次に成る神は……」と表現している。この「次々に生まれ成る神」の延長に、現在の俺達が生まれ成ったということだ。つまり、最初の三柱の神によって始まった宇宙生成活動は今も連続と続き、今現在、人間を含む万物万象が、生成活動を引き継いでいると考えるのが日本民族の宇宙観であり人間観だ。

俺がこの話をすると、CERNの関係者達は、すでに日本の神話を知っていた。宇宙の生成は、凄まじいエネルギーの凝縮と爆発的拡張によって為されたという日本の神話の考えは、まさに、現代科学の最先端をいく素粒子物理学の理論と共通すると指摘した。

俺達が、引き継いだ宇宙の生成活動をしっかりと果たすことができれば、子孫

にそれを受け渡すことが出来る。親から子、子から孫へと生成活動を引き継いでいけば、天壤無窮（てんじょうむきゅう）つまり天地と共に末永く繁栄すると思えるのが、日本民族の社会観だ。

現在の社会は、宇宙の原理とは正反対に、個人主義や権利思想、そして最近では、コロナ対策として「新しい生活様式」と称する社会の分断解体を進め、恐怖による「相互不信・対立」「孤立化・非社会化」「情報統制と法的強制」により管理社会を形成しようとしている。

国民一人一人が分断され、グローバリゼーションの最前線に立たされている現状を認識し、そこから離れて日本の伝統文化に根差した共同体をつくる。その共同体を、寝食を共にする仲間たちと共に育てていけば、何から何を守るべきかがわかってくる。時と共に人が変わっても、その共同体が一つの生命体のごとく変わらずに存在し続ける源、それが文化慣習である。この文化慣習が守られていけば共同体は末永く生き続ける。

その延長上に、日本がある。共同体は国家の縮小相似形である。理想とする日本、命をかけても守りたい日本、その日本を責任を持って運営するための秩序を自分たちで考え実践すればよい。

何が起ころうが、歴史的伝統文化に則り、日本人が日本人として普通に生きていけるようにする。一人一人が、日本の共同体の一員となり、心をつなぐれば、私たちのかけがえのない大切な日本の伝統文化をグローバリゼーションから守るための具体的な対策が生まれてくる。国民が自ら、守りたい国「日本」を実践することこそが、本当の国防に他ならない。



045